
Fate/RADIANT MYTHOROLOGY

蘇芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / R A D I A N T M Y T H O R O G Y

【Nコード】

N 7 9 8 7 Y

【作者名】

蘇芳

【あらすじ】

布団で寝ていたはずが、なぜかグラニデとかいう世界で救世主と
言う名のディセンダーになりました。解せぬ。

なんやかんやあって戻った3年後、変な青タイツの人に殺されかけ
ました。どうやら第五次聖杯戦争と言う名の殺し合いに巻き込まれ
た模様です。まじ解せぬ。

そんなノリでお送りする、まるでだめな作者の自己満足極まりない
小説です。なにもいわず、生暖かい目で見てやってください。よろ
しく願います。

設定 & a m p ・注意（前書き）

この小説の作者は、小説を執筆するのは初めてです。
それを頭のはじっここの片隅に置いて読んでいただけたら幸いです。

設定 & a m p ・ 注意

設定

名前 高倉 奏たかくら そう

性別 女

年齢 17

身長 167cm

体重 58キロ

容姿 知的な印象ではあるが特別美人でもなければ特別可愛いわけでもない。割と筋肉質以外特筆すべきことは無い。つまりはご想像にお任せします。

補足という名の詳しい設定

中二病からようやく離脱しかけていた中学3年生の夏、寝ていただけのはずなのになぜか魂だけがティルズの世界へ。解せぬ。

しかもマイソロ2の世界で、なぜか自分がディセクター。まじ解せぬ。

なんやかんやでエンディングを迎え、なんやかんやで魂が身体に戻り、今に到る。時間はそのまま進んでいませんでしたと言うようにあるごく都合主義。

中二病はとりあえず治ったけど完治はしておらず、まだその名残がある状態。

使う予定の職業

魔法剣士
盗賊
ビシヨップ
狩人
海賊

の予定です。

注意

この小説はあくまで自己満足の元書かれた小説です。
あ、無理だな。合わないな。ツマンネ。と思われた方は、なにも見
なかつたことにして他の面白い小説を読まれることをお勧めします。
つまり何が言いたいかというと、絹豆腐メンタルなので罵詈雑言は
しないでください。
お願いします。

第一話という名の導入部（前書き）

急ぎ足の説明みたいになってしまいました…。

第一話という名の導入部

突然で申し訳ないのだが、皆様は何の前触れもなく理不尽な目に遭遇したことはあるだろうか。

どんな事だって良い。小さなことでも、ほんの些細な、取るに足りない事だって良い。

例えば、給料日でお金を下ろしたばかりなのに財布を落としてしまったとか、学校でいきなり抜き打ちの持ち物検査やらテストやらがあったとか、バイト中に自分以外の誰かが起こしたミスを自分のせいにされ怒られたとか、交通ルールをしっかりと守ったのに相手の不注意で事故にあったとか。

やはりこれは十人十色。人の数だけ色々なことがあるのだろうか。

さて、話は打って変わって、いきなり理不尽な目に遭遇したら皆様はどうするだろうか。

泣く？怒る？呆れる？呆然とする？啞然とする？途方に暮れる？現実逃避をする？現状打破に勤しむ？

やはりこれも十人十色。人の数だけ様々な方法があるのだろうか。

またも話は打って変わって、なぜ皆様にこのような問いかけをしたのか、疑問に思っている方もいらっしゃるだろう。

しかしこれから話すことは荒唐無稽、俄かには信じがたい代物である。

だが、この話は本当に起きた出来事であって、妄想、空想、創造、などでは決して無い。

まあ、別にその話を何も一から十まで全部信じるとは言わないので、その一から十の前にある根本的な前提部分として信じてほしい。…
覚悟はよいだらうか？

最初から最後まで語ってしまうと長くなるので簡単にまとめてしま
うと、

布団で寝ていたはずなのに、気が付いたら異世界で、しかも救世主
になっていた。

……うん、その反応はご尤もだ。間違っていない。間違っていないどころかむしろ正しい。
私も見知らぬ人間にそのようなことを言われれば間違いなく引く。たとえ友人でも引く。その出会いを無かったことにしてしまいたくなるくらいにドン引く。

だが、悲しいことに事実なのである。

布団で寝ていたはずなのに、なぜか上空で、しかも船を目掛けてパラシュート無しのスカイダイビング状態だった。…今考えるとよく死ななかったな、自分。

…まあそれはさておき、ひと悶着合ったりしながらもバンエルティア号という船に乗せてもらえることになり、グラニデという異世界と判明し、剣位は覚えておいたほうがいいと言われなぜか剣を習い、この世界にはデイセクターって言う救世主がいるんだよ。ってピンク髪の美少女に教えてもらって、またひと悶着おきて、

某ドラゴンのクエストな勇者よろしく、実は私が世界を救う救世主^{ダイセン}でした。な落ちで。

そこからまたまたひと悶着合ってラスボスが判明して、ラスボス倒す準備をして、ラスボス倒して、エンディングを迎えてこつちに戻ってきました。おしまい。…な具合で。

…ん？今途中色々すっ飛ばしたろって？いやだって、長くつても面倒くさいだけでしょ？

あれ、何の話をしてたんだっけか。

…ああ、そうそう。理不尽な目に遭遇したときの話だ。

もちろん、最初は何で私がこんな目に、とか思ったけれど周りの人たちがよかったのか最初以外はそこまで理不尽なこととは感じなかった。本当に最初以外は。

そう、私が果てなく理不尽だと思ったのは異世界に飛ばされたことではない。

異世界に飛ばされた後のこと、つまり今だ。

こっちに戻ってきた後、異世界に飛ばされる前とまったく変わりない生活を送っていた。

普通に勉強して遊んで…、と別に何が変わったでもなく普通に過ごしていた。

受験も無事終わり、高校は近場の穂群原学園に入学した。

成績も上の中から中の上あたりをうろつろしているし、運動神経も抜群に良い訳ではないが、練習すればそれを極めている人ほどではないが、結構動ける。

ただ、ひとつだけ、おおきく変わったことがあった。

上に挙げたとおり、頭がすごく良くなったとか、運動神経が抜群に良くなったとかそういうわけではない。

ディセNDERとしてなのか、ただ単に経験が付いてきただけなのかは分からないが、

5つの職業クラスに変身チェンジすることができるようになったのだ。

いや、高校生にもなって変身っていう表現どうよとか思わないでもないのだが、表現としては間違っていないのでスルーして欲しい。

話を戻してそのことに気が付いたのは約2年前のことである。

それなりに高さのある階段から落ちそうになって思わず受身を取ろうとしたらなぜか盗賊ジョブチェンジに職業変更していたのだ。わけがわからないよ。

もう少し格好良くその事実に気が付きたかったと落ち込んだのは、まあ内緒の話にして置くとして。

わかったことが、自分の意思で自由に変身できる。変身できるのは魔法剣士、盗賊、ビショップ、狩人、海賊の5つ。その職業の共通点はレディアント装備を持っていることだ。まあつまりは普通の制服からファンタジー要素満載なレディアント装備に変わるのである。

さて、今ここで職業ジョブチェンジ変更について説明し始めたことに、察しの良い人なら何か感づいたかもしれない。いや、大体の人が私の回りくどい話にイライラしているかもしれないので回りくどいことは言わない。

端的に言ってしまうえば私は今、狩人のレディアントに職業変更をし
て逃げ回っている状態である。ジョブチェンジ

なぜなら私は今、どこからも疑いようもなく果てなく理不尽な目に
あっており、

全身青タイトスの槍を持った青年に追い掛け回され命の危機に瀕して
いるからである。まじ解せぬ。

第二話といづ名の回想劇

さて、またも突然で申し訳ないのだが、私が如何にして全身青タイツの槍を持った奇抜な青年に追いつけ回されることになってしまった経緯をお話しようかと思う。

事の始まりは、英語の課題を学校に忘れてきてしまったことだった。

授業が終わった後、教室の掃除を手早く済ませいつものように教室で友人達と課題だるいねーとか喋っていたら見回りの先生から早く帰るよう促されて、慌てて逃げるように教室を出たのがいけなかった。

そしてまたそこから名残を惜しむように友人達とそこそこの時間まで公園で喋ってしまったこともいけなかった。

そして家へ帰り、母親の今日から出張ですと言うメモ紙を発見して、ああそういえばとそんなことを言っていたなと思いつつ、母親が作り置きしてくれていた夕食を食べ、さあ課題を終わらせてしまおうと机へ向かった時に、課題を学校へ忘れたことに気が付いたのだ。

しかも時計の針が夕方から夜へ移動するかしないかと言う時間で、課題を取りに行くならダッシュで行かなければ学校がしまってしまうような時間だった。

英語の担当は藤村先生だし英語は一限目からだし朝から虎の咆哮を聞きたくない一心で、部屋着から制服に急いで着替え、学校へ向かったと言っわけだ。

ぜえぜえと息を切らせながらも学校へつき、幸運にもまだ昇降口は開いていたのでほっと胸を撫で下ろしつつ、夜の学校にびくびくしながら課題を取りに行った。

特に何事もなく教室へつき、課題を取って少し気が抜けてしまったのがいけなかったのかも知れない。全力疾走で疲れていた身体を少し休めてから家へ帰ろうと思いい、それを実行したのがいけなかったのかも知れない。

いやだつてまさか学校の校庭でドンパチやってる人達がいるとは思わないじゃないっすか。

今になってからこんな風に軽く言えるが、それを目撃したときの心情は半端なかった。全身青タイツと思われる青年と赤いマント靡かせた青年が戦っていた。しかも赤い青年の後ろにはたぶん私と同年

代と思われる少女も居た。どういうことだっただよ。

え？あれ？ここって日本だよなあれ？って言ってしまうくらいには動揺した。ていうか思わず声に出した。まあ、自分でも聞こえるか聞こえないかくらいに声は掠れていたけど。

今までの経験か、それとも人間の本能としてかは分からないけれど思わず学校の女子トイレに逃げ込んだ。いや、だってテンパってたんです。

そして校内が少し騒がしくなり、落ち着いて暫らくしたところを見計らって外に出た。

案の定、校庭にはもう誰も居なくて、でもいやな緊張感は拭えなくて、夜の学校に入ったとき以上にビクビクしていたと思う。

とぼとぼ歩きながら、あああれって白昼夢だったのかなとか、疲れたのかなとか、少し余裕を持って考えられるように落ちついた頃。変な夢だったなあとか、疲れすぎて幻想でも見たんじゃないかと思いながら角を曲がった。

刹那。

「よお」

と、青年の声。

どこから？

「いい、月夜だと思わねえか」

わ
た
し
の

「なあ、嬢ちゃん？」

後ろから

！

頭で理解する前に、本能が、全神経が、殺気を感じ取る。

逃げ切ることは、きっとできないだろう。

必然的に、殺し合いになることはもう、理解わかってしている。

ならば…！

「…へえ、今を避けるたあやるじゃねえか」

「……………ま、命懸かってますし？」

「ただの女学生だと思ってたんだがよ、俺の槍は避けるし、今、一瞬で姿が変わったな。」

そのけつたいな格好と、嬢ちゃんが一体何者かを、俺に教えちゃくれねえか？」

「…答える義理は、ないですよね」

「はっ、そりゃそうだ。」

まあ、喋りたくなるようにすりゃいいだけの話だ……！」

「っ、むぎむぎやられてたまるかよ!!」

そして、私たちは、私と彼は走り出した。

私は彼から逃げるために。

彼は私を追いかけるために。

さて、前にも話はしたが一応私に変身
した職業を覚えておこう。

私は、戦える広い場所まで走るために、

五つの中で、一番敏捷値の高い
狩人に、職業変更をしたのである。

そうして話は、現在に戻る。

いや、でも全身書タイツってどゆこと？

第二話といづ名の回想劇（後書き）

あれ、もしかしてシリアスぶち壊し？

第三話といじ名の戦闘劇（前書き）

捏造が入ってます。戦闘シーンがしょぼい上に少ないです。

第三話といじ名の戦闘劇

こうして私は紆余曲折を経て、全身青タイトの槍を持った青年に追いかけられることになったのである。

というわけで、現在。

決して近いとは言えないが全力で走れば近いかもしれない、そこがこの広さのある公園、というかほぼ空き地に向かって爆走中である。

その槍を持った青年は、あくまでも私の勝手な想像なのだが、少し楽しんでる風である。

きつと、コチラの意図に気が付いているのだろう。

一体どこまでやれるのか、お手並み拝見といこうじゃないか、といった心境なのだろうか。それとも、どう甚振ってやるうかなんて心境なのだろうか。どちらにしる腹立たしい。

とはいっても、結構いっぱいはいなのでどうすることもできないのである。世の中って世知辛い。

しかし、自分が最速最強と驕っている訳ではないのだが、常人には追いつけないほどの速度で走っているにもかかわらず、青年は引き離されること無く付いてきている。

まあ校庭でドンパチやっている時点で普通の人間ではないと思っ
てはいたが、ここまで来ると本格的に人間でない事が伺える。
しかも一種の神々しさと言うかなんというか、ありていに言っ
てしまえば魔力の塊^{マナ}というか、魔力が人型をとりそれに魂が宿ったよう
に感じられる。

要するに幽霊もどきですねわかります。

物理攻撃って通用するかな属性攻撃：光とかじゃないと通用しない
のかななにそれこわい。話がそれた。

いや落ち着くんだ、私。よく考えろ、私。

今の状況をよく確認すれば、必ず勝機は見えてくるはずだ。

童話に出てきそうなファンタジーな狩人のレディアント装備姿で爆
走する、私。

それを追いかける、全身青タイトの槍を持った青年。

なにこれシニール。
余計に混乱したただけだった。

なんてアホなことを考えながら角を曲がる。目的地はもうすぐそこだ。

公園に着き、走るスピードを少し緩め、スライディングをしながら後ろを振り返る。

すでに青年は停止しており、不敵に笑んでいる。しかも、青年と私の距離は大分離れており、まるで、こちらの攻撃を誘っているかのようだ。

考えすぎと思われるかもしれないが、先ほどは攻撃できるような隙も無ければ、後ろを振り返る余裕も無かったほどに追い詰められていた。

……完全に、攻撃誘われてますよねこれ。

しかし、なぜ彼はこれほどまで、未知数の敵の前で余裕を持っていられるのだろうか。

私の能力を知っている？ いや、彼は私にそれはなんだ

と問いかけた。それは無い。

彼は自分自身を最強だと思っている。 ありえるかもし

れないが、そういうタイプには見えない。

残る可能性としては、

「なんだ、もう逃げるのはやめたのか？」

「逃げ切れると思えないし、ちよつとある可能性を確認したかったんで、ねっ！！」

敵から視線をはずさないままに、別方向に魔力をこめて、弓を引き、矢を放つ。

その魔力を帯びた矢は、彼に一切触れることなく、一直線上にある木に突き刺さる。

ピンゴ！

「おいおい、俺のことちゃんと見えてるか？どこに向かって撃つんだ？」

「お兄さんには、矢避けの能力でもあるのかな？」

「……！？……へえ、なんで分かった？」

「今撃った矢は、狙った敵へ向かって行く矢だったんだよね。」

成程、お兄さんが余裕ぶっこくのも当然ってわけか」

「嬢ちゃんとの相性は最悪だぜ？潔く、諦めて俺に殺されるか？」

変身したとき、私はすでに弓を持っていた。

それを見て、彼は油断はしなくとも、余裕を持っていいのだ。

相手の攻撃は自分に当たらず、自分の攻撃は相手に当たる。
私が言うのもなんだがずいぶんとまあチートな能力だスキルこと。

しかし、このままじゃまずいのも事実だ。

なるべく自分の手の内を明かさないのがベストなのだが、もうそんなことを言っている暇は無い。

ならば。

「冗談きついでお兄さん。確かにこのままじゃお兄さんとの相性は最悪だ。

だけど最悪なのは、狩人との相性だけであって、

他なら、難しいけど、最悪じゃない」

「…また、変わったな。

今度は、剣士か…？」

「…」

ま、剣士は剣士でも魔法剣士だけどね。

声には出さず、改めてのステータスを確認する。スピードも申し分ないし、攻守ともにバランスの取れた職業。

命のやり取りをする戦いには、この職業がぴったりだ。

「さて、お兄さん。私はこんな所で死ねないし、死にたくない。

そういう訳だから、全力で抵抗させてもらうよ…！」

「はっ、おもしれえ！やってみな！」

踏み込みは、同時だった。

しかし、スピードはやはり彼のほうが上なのか、かなり開いていた距離があつという間につめられる。

そしてそのままの速度で槍を振るい、攻撃を仕掛ける。

私はそれを剣で受け流し、相手に一太刀浴びせようと剣を振るう。

相手はその攻撃を受け流し、また攻撃を仕掛ける。

一進一退、まさにこの言葉通りに攻守が反転していく。

だが互いに一步も譲り合うことなく、各々の武器を振るう。

彼は私を殺すために。私は彼に殺されないために。

だが、その攻防戦にも綻びが見えてくる。

どういう訳か、私が彼のことを押し始めたのだ。

彼には無数の、決して浅いとはいえない傷がある。無論、私がつけたものだ。

対する私は、無傷とは言わないけれど、ほぼそれに近い位の浅い傷しか負っていない。

もちろん、こちらが鎧と盾を装備しているということもあるのだろう。

だがしかし、これは一体どういうことだろうか。

こちらからしてみれば好都合なのだが、どうにも違和感が拭えない。何かのタイミングをうかがっているのか、それともこちらの攻撃パターンを観察しているのか。それらとはまた別のことか。

どちらにしろ、警戒するに越したことは無いな。

彼は、今も笑んでいる。

「なかなか、やるじゃねえかつ！」

「それは、どうもっ！」

彼は楽しそうに言う。純粹に戦いを、楽しみながら。

いくつもの傷を受けながらも、それを感じさせない動き。押しているのはこちら側なのに、まるでこちら側が押されているように感じられる。いや、押していると思うただけで、実際に押されているのはこちらなのかもしれない。

すると突然、彼はバックステップで距離をとり、槍を構えたまま、動作を静止させた。

そして、おもちゃを取り上げられたような表情で口を開く。

「俺としては、もちっと続けてたいんだがよ、そうもいつてられねえみたいだ。

そろそろ、決めさせてもらっぜ」

そのまま彼は、きつと秘奥義に近い技の、絶対的な宣言を口にす
る。

「刺し穿つ死棘の槍

ゲイ・ボルグ

！」

刹那、

彼はこちらへ跳躍する。私の心臓に狙いを定めて。

避けることはできない。防ぐことはできない。なぜか、そう感じられた。

せいぜい私にできることは、その槍を、この身に受けることだけ。

けれど、まだ策はある

！

やってみなくちゃわからない、一か八かの賭けだけれど。

何もせずに、死んでしまうことは、もう二度とあの子に会えないまま消えてしまうのは、絶対に駄目なことだ！

息を吐き、感覚を研ぎ澄ませ、相手を見据える。

チャンスは一度きり。失敗したら、即DAEDENDの大博打。

彼が目前まで差し迫る。

魔力を籠め、術式を組み立てる。

槍が、今にも心臓を貫かんとしたとき、この技は、発動する

！

「
」

鮮血が、舞う。構えていた、盾を落とす。
槍は、確かに私を貫いた。

ただし、心臓ではなく、私の肩を。

守護方陣。

自分の周りに小規模の魔方陣を張り、触れた敵にダメージを与える。それを応用して、下から衝撃がくるように術式を組み替え、攻撃を上逸らしたのである。

どうやら、今もこうして思考できているということは、成功したらしい。

彼は、一瞬驚いた顔をしてから、すぐさま笑みを浮かべ、私から槍を引き抜き、距離を取る。

「…こりゃ驚いた。一応これは、必殺を謳ってるんだがな」

「…ま、結構、ギリギリだったけど、…ね」

痛みでうまく、舌が回らない。肩が、焼けるように痛む。血が、急速に体内から失われていくのが分かる。

この感覚は、もう味わうことの無い物だと思っていた。あの子との戦いで、もう最後だと思っていた。

けれど、私は今、確かに、戦っていた。

どこの打ち切り漫画のエンディングのように、私の戦いは、まだ続いていた。

「このまま戦い続けていたいのには山々なんだが、ご帰還命令が出やがった。

そういう訳でだ嬢ちゃん、今度は互いに、全力で殺しあおうぜ」

「はっ、やな、…こった」

そうやって青年は、まるで闇に溶けるように消えていった。

先ほどまで騒がしかった公園が、一気に静寂に包まれる。もう、この公園には、私以外誰もいない。

とりあえずそろそろ傷を治さなくてはとまずい思い、ビシヨップへ変身する。

術式を組み、キュアを発動させる。傷は問題なく治った。が、術が発動するまでに、結構時間が掛かってしまった。

これはきつと痛みのせいでも、血が足りないせいでもない。

先ほどの青年の言葉が蘇える。

『全力』で、か。一応、あれが全力のつもりだったんだけどなあ…。最後の戦いからもうそろそろ、後半年くらいで3年が経つ。そののブランクか、全盛期には程遠く、きこちない動きが多かったのだろう。現に術に倍近くの時間が掛かってしまった。思わずため息がこぼれる。

あの青年は『またな』と言った。ということはまた私を殺しに掛かってくるのだろう。

それまでに、どうにかして身体を、ディセクターであった頃の身体に戻さなくては。今から気が重い。

そしてふと、公園にある時計をしてみる。

時計の針はもう夜中をさしていた。

これはまずいやばい。急いで帰って課題をやらなくて…は？

あれそついえば、

私、課題どうしたっけ。

今度は別の意味でため息がこぼれた。
夜風が、なんだか身にしみた。

第四話 一難去ってまた一難（前書き）

無駄に長いです。

第四話 一難去ってまた一難

爆走してきた道を、重い足取りで進んでゆく。

俯きフラフラしながら「課題…、課題…」とぶつぶつ呟きながら歩いている姿は、傍から見れば、きつと受験のストレスで自殺してしまった女子高生の幽霊のように映ることだろう。幸いにも、すれ違った人はまだいない。

…一体、どこで落としたんだろう。

高校2年生にもなって、マジ泣き寸前である。

ちゃんと名前書いてあるし、誰か親切な人が拾って届けたりしてくれないかなあ…。

今思えば、課題さえ取りに行かなければ、追い掛け回されたり、殺されかけたりすることも無かったのではなからうか。

そうだよ、朝早起きして学校でやれば済むことだったんだよ。

…今更、後の祭りか。

しかし、本当にどこで落としたんだか。

思い当たるのは、学校…、は無いな。しっかり課題を抱え込みなが

らガクブルしてたし。後は走ってきた道と、死の追いかけてこが始めた所か。

あー、後者にあるっぽいな。レディアントに変身したのもそこだったし。きつと槍を避けたか変身したかの時に落としたのだろう。

いやまあ、帰り道だから別にいいんだけどね。でも疲れが一押しというかなんというか。やるせない気分ではいい訳ですよ。

しかも言峰教会、もとい、冬木教会の傍を通らなくてはならないという事。それがさらにやるせない気分には拍車をかける。

さつき走っているときにはそれ処じゃなかったので気にはならなかったが、なんというか、こっ、はつきり言ってしまうとあの教会の傍を通ると、気分が悪くなるし吐き気がする。

なんと言えれば良いのだろうか。わかりやすく例えるならば、某スタイリッシュ戦国アクションゲームに出てくるCV能登さんな第五天魔王の黒い手に手招きされて引きずり込まれそうになる。そんな感覚だ。

あの教会の神父も変な感じだった。

いや、神父に直接会ったことはないのだが、遠目から見たことがある。一目見ただけでなんかもう、吐き気がした。

そついうわけで、本来清浄なはずの教会なのに、いろんなとす黒さ満載な冬木教会とは相性が悪いのである。

……少し遠回りになってしまいが、別の道から行こうそうしよう。

まったく、今日は厄日なんじゃないかならうか。

課題忘れるわ人外がドンパチやってるわ追い回されるわ殺されかけ
るわで。

私は神様というものに何かやらかしただろうか。

別に神様とか信じてないけど。むしろ私が神様の存在だったし。一
部の人間に崇められてたし。まあ向こうでグラミテの話だけだ。

そうして、坂道に差し掛かったとき、

「あ、れ？衛宮君に…、遠坂さん…？」

一部の生徒の間で、実はアイツの夢は正義の味方なんじゃないかと
噂されている衛宮君と、生徒全員の羨望の眼差しを浴びる、穂群原
学園のミス・パーフェクトこと遠坂さん。あと黄色い雨合羽を着た
なんとも形容しがたい美少女がそこにいた。しかもその美少女は人
間ではなく、先ほどまで一戦交えていた青年と同じ気配。警戒はし
ているようだが、殺気は感じないので放置しておくとして…。

この三人の接点が見当たらない。

「っ…！あ、高倉…？。どうしたんだ、こんな時間に」

「いや、それは私の台詞だけでも…。まあいいや、実は落としてし
まった英語の課題を搜索してました」

ここがかっこつけて、ちょっと散歩、なんて言おうものなら遠坂さんに絶対零度の眼差しで微笑まれながら、「へえ、そうなんですか」と言われそんな気がしないでもない。

それはなぜかって？彼女を見ていると、どういつ訳か守銭奴アニな猫かぶりを思い出すからだよ。

「あ、もしかしてこれのことか？」

「あっ…！それだ！ありがとう衛宮君！」

なんと、衛宮君が私の課題を拾っていてくれてたらしい。

直接渡せてよかった、と照れたように微笑んでいる衛宮君から直接課題を受け取る。…うっかり惚れちまったらどうしてくれる！この

一級フラグ建築士め！

よかった、よかったと興奮する私を微笑ましそうに見つめる衛宮君。ちよ、こっち見んなよ／／／／照れるだろ／／／／／

すると、

「…ねえ、高倉さん？」

と、冷ややかな声色の遠坂さんから声をかけられた。

課題が思わぬところで見つかり、興奮して熱くなっていた身体が一気に冷める程度に、彼女の声色はとても冷たかった。

油の切れたブリキ人形の如く彼女のほうを向いてみると、声色と同じくらい冷ややかな瞳なのに笑みを浮かべている遠坂さんと、視線が武器だったらまず間違いないく即死レベルなくらいに睨みを効かせた黄色い雨合羽の美少女がこちらを見ていた。

なんだか、いやな、あせを、かいてまいりました。

「どうして、高倉さんの課題がこんなところに落ちていたのかしら？」

高倉さんのお家は、確か反対方向だったわよね？」

まるで囁くように、聞き分けの無い子供に言い聞かせるように問いかける彼女。

え、とおさかさんちようこわい。

これはあれか、この私を差し置いて、何衛宮君と楽しそうにおしゃべりしてるのかしら？みたいな修羅場発生？

まずい、まずいぞ。私の明るい学校生活の為に何とかして彼女の誤解を解かなければ…！

「あ、いや、そのですね。話せば長くなると言つか、なんと
言つか
…。その…！」

付加硬直なんです！…！！…！！」

一瞬、別な意味で空気が凍りました。ガリッって音もしました。

「すみません噛みました。
不可抗力なんです。すみません噛みました」

「えっ？ああ、うん。大丈夫よ？落ち着いて、ゆっくり話して頂戴
？」

私は今、目も当てられないようなひどい顔をしているのだろう。遠坂さんが急に優しくなった。だが痛い。これは痛い。遠坂さんのやさしさが痛い。衛宮君の気遣わしそうな目線も痛い。美少女の哀れむような視線も痛い。舌も痛

い。
とりあえず落ち着こうと深呼吸を繰り返し、何とか落ち着いたところで、口を開く。

「あー、その、ですね。課題を学校に忘れたことを思い出しまして。時間が夜に差し掛かってたんで急いで学校に取りに行つて、帰ってくる途中に、なんていうか、その。

変質者に追い掛け回されて。

たぶん逃げ回っているときに落としたんだと思います……」

嘘は言っていない。嘘は。

「それで、なんとか変質者を撒けたんで、落とした課題を探し回っている途中に遠坂さんたちに会つたしだいでございます……」

「変質者って、大丈夫だったのか!？」

「ああ、うん。なんとか」

純粹に心配してくれている衛宮君には申し訳なさを感じつつ、遠坂さんの方を窺う。

彼女は何かを思索し、何かに思い当たつたような顔をした後、何事も無かつたの用に、困つたように眉を下げながら、

「そう、大変だったんですね」

とだけ言った。

とりあえずは納得していただけたようだ。
ほっと胸を撫で下ろしつつ、それじゃあこれでまた明日。と立ち去ろうとすると、またもや遠坂さんからストップが掛かる。

「一応、先生と警察に不審者の特徴を伝えようと思うんです。

その不審者の、特徴と、何があったのか、何を見たのかを、全部、私に教えていただけますか…？」

……………？こ、れは…？

これは、暗示、を掛けられているのだろうか？

彼女から、魔力が伝わってくる。なんか、こっ彼女に洗いざらい全部喋ってしまったくなる衝動に駆られるということは、これは尋問系の暗示なのだろうか？

…一応掛かった振りをしておいた方がいいのだろう。私は一般人ってことになっているし。でも全部を喋るわけには行かないし、ううん。どうしたものか。

…肝心なところはぼやかせば大丈夫、かな？よし、それで行くぞ。
唸れ私の演技力！

「誰かが、校庭で戦っているのを、見ました…」

「「「!?」」」

「遠くからだだったので、よく見えなかったけど、怖くなって、女子トイレに逃げ込みました…」

「…それから？」

「静かになって、暫らくしてから外にでて…、帰り道で、変な人に、襲われました…」

「っそいつの、特徴は…!?」

「特、徴は……」

「全身、青タイツ」

「……、っはあああ!?!?」

おお、暗示の魔力が途切れた。いやまあ、狙ってやったんだけどれも。私の演技力も捨てたもんじゃないね!

まあきつと遠坂さんたちは、槍を持っていたとか、そういうった類の特徴を期待していたのだろう。

正直ここまで驚いてくれるとは思ってなかったよ、本当に。あ、衛宮君と美少女ずつこけてる。

いや、だってインパクトが強すぎたんだもんよ。あの青年の服装。

そして遠坂さん。貴女はやはり、猫被りだったんだね。

「ん？あれ、どうしたの三人とも？」

「あ、いや、なんでもない……」

「そう？それじゃあもう遅い時間だし、私はもう帰るよ」

「ええ、気をつけてね……」

頭が痛いと言う風に、元気の無い返事を返してくれる二人。

ごめんなさい、ぶっちゃけ速く英語の課題片付けたいんです。そしてこのままここで私と出会ったことは無かったものとして扱って欲しいかな。

ああ、ようやく家に帰れる。そう思いながら足取り軽く、坂道に背を向け、歩き出す。

「ねえ、」

と、
背後からの呼びかけ。

「お話は終わり？」

幼く、天使を思わせるような少女の声。
そして、人ならざる者の、巨大で、凶悪な気配。
振り返ってはいけないと、本能が叫ぶ。
これは危険だ、速く逃げろと。

「バーサーカー」

と、誰かが呟いた。

思わずため息をつきたくなる衝動を抑え、後ろを振り返る。

そこには、

雪のような白銀の髪に、ルビーのような赤い瞳を持った少女と、異質としか言いようが無いほどに凶悪で、いいかんに最悪な、人とは思えないほどの巨大な体躯。

「こんばんは、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

お兄ちゃん、となると衛宮君の知り合いか？

視線を投げかけてみると、彼の顔には訳が分からないと書いてあるかのように呆然としている。

「
驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

遠坂さんが、まるで親の敵を見るような眼で、呟く。

美少女も、雨合羽を脱ぎ捨て、何処からとも無く取り出した剣を構え、臨戦態勢に入る。

そして、私は、

そういえば、今日の星占い、最下位だったなあ。と、
現実逃避をしながら、これから始まるであろう戦いに、嫌な予感を
感じ得ないのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7987y/>

Fate/RADIANT MYTHOROGY

2011年11月27日05時53分発行